

メルロ=ポンティの真理論：身体性・時間性・合理性

樋渡，河
九州大学文学部：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1448731>

出版情報：哲学論文集. 45, pp.97-112, 2011-10-01. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：



メルロ＝ポンティの真理論

—— 身体性・時間性・合理性 ——

樋 渡 河

はじめに

本稿は、メルロ＝ポンティ哲学における「真理それ自体 *la vérité en soi*」というものの位置づけを、主として『知覚の現象学』第三部「時間性」の章を手がかりに、探るものである。すなわち、それ自身が真理に他ならない時間の合理性現象 *le phénomène de la rationalité* に、真理と誤謬という二つのあり方を超える「真理」との繋がりをみることで、人間存在の表現の努力がなにを根拠になされると、メルロ＝ポンティが信じていたのかを明らかにすることが本稿の課題である。というのも、メルロ＝ポンティにおける真理論とは、決して人間存在の認識論的な判断のあり方を構造的に説明することではなく、むしろな^ぜわ^れわ^れは^飽く^なき^表現^の努^力を^試み^るの^かと^いう、いわば実存主義的な視角からの表現論に他ならず、広い意味での芸術制作への根源的意志の源泉こそが、このことについてのメルロ＝ポンティの真の問題であり、その存在はメルロ＝ポンティの生涯にわたる信念(の一つ)であったと考えるからである。

『知覚の現象学』に真理論なる部門があるとするれば、その論敵は現象を介さず存在へと向かう独断論的形而上学と、現象と存在とを切り離し現象を単なるみかけに貶める懐疑論であり、それらを同時に乗り越えることで真理についてのある見方を示すことに目的があると言えるだろう。われわれの生の彼方においてそれを主導する絶対知らないし絶対的存在をひとたび前提してしまえば、それを独断的に信じるにせよ、それを疑うにせよ、真理とわれわれとのかわりはそので失われてしまふ。

現象と独立に自存する絶対的な唯一の真理というものはないが、「なまざまな真理」(PP 452)があり、それらはわれわれを介して、おのれの存亡をかけた争いを続けている。真理はわれわれ同様に生成消滅し、誤謬や修正の可能性を免れない。これがメルロ＝ポンティの描かれわれの真理論的状况である。しかし、このような状況であるならば、その真の論敵とも言うべきニヒリズムを呼び込みはしないか。というのも、ここにおいてはあらゆる真理が無意味である可能性を排除できないからである。ところが、メルロ＝ポンティはわれわれの生を「真理への接近」(PP XI)として捉え、「知覚は真理それ自体を直指す」(PP 66)とも語る。ここでの「真理それ自体」は、誤謬可能性と不可分の真理というよりも、われわれを常に変わず導くものであり、この点でわれわれの生は無意味ではなく、全体としては合理性(rationalité)に満ちているのである。これはどういふことだろうか。

序論の「現象野」の章において、真理は知覚が暗黙裡に想定する根源的信念 la foi originaire / primordial であるとされている(PP 66)。つまり、各瞬間はそれに先立つ瞬間およびそれに続く瞬間と調整され、私のパースペクティブは他者のパースペクティブと調整され、いまは私にとって未決定な事であってもやがては決定的な事として現れてくるはずである、という知覚の信念として、真理それ自体が規定されている。もしそうならば、われわれの生は、各瞬間が相互に断絶したり、私と他者の知覚が相互に連絡不可能となったり、全的な誤謬や純粹偶然事に曝されるといふことではない。ここに、真偽の判定基準として機能するわけではないものの、なまざまな真理の原型 l'archétype であるよみ根拠的合理性があり、これこ

それが、二ヒリズムへのある種の對抗装置として機能し、人間的なあらゆる表現がたとえ終わりのない努力であるとしても徒勞ではないと、われわれに信じさせる根拠となっているのではないか。

そのためにもまず、さまざまな真理とそれを実現させる可能性の条件である身体性（第一節）を、その後、あらゆる合理性現象の原型である時間的現象と時間性（第二節）を検討する。

第一節 身体性と真理 私の身体は真理の中に住む

1 永遠化された真理の批判

「三角形の内角の総和は二直角に等しい」といった諸特性によって定義される三角形の理念はそれがそう信じられているような永久不変性を備えているだろうか。このように第三部「コギト」の章でメルロ＝ポンティは問いかけている。たしかに、普通われわれは三角形の定義を疑いはしないし、この種の定義は理性的思考を持つものならば誰もが妥当だと認める真理だろうと考える。それどころか幾何学的真理はたとえ人間の世界が失われたとしても永遠に存在し続けるとさえ主張される。理念は、第九交響曲や教会や鉛筆といった文化的獲得物や、それらがわれわれに示す意味やイメージといった存在者と存在仕方が異なるのであって、後者が歴史的にも地理的にも文化的にも限界をもつのに対し、前者はそれらを超えた普遍妥当な真理であると思われる。しかし、さまざまな意味から理念や真理を峻別する思考は、それが基づく可能性の条件を忘却しており、それ自体が偽善的であるとメルロ＝ポンティは断じている。理念や真理もさまざまな意味と同様に特定の歴史的地理的な限界を持つ。というのも、建物や鉛筆が消えうせ、その全楽譜とそれを聴いた人の記憶が失われれば、文化的獲得物がもたらす意味もまた消失するように、インクや紙といった事物やそれを表現する記号などの文化装置、それを理解しその媒介者となってきた人間が存在しなくなれば、理念もまた消滅せざるをえないからである。これは、神や精神、

善や正義といった理念についても同様である。ある種の理念が永遠の価値を伴っているように見えるのも、実際の祈りの仕草や勇敢な判断といったそれを表現する人間の行為が、ある時に特定の価値を意味するものとして創造され、それ以後伝統として引き継がれてきたからに他ならない。理念や真理はさまざまな意味と本性を異にするわけではなく、それらがそこにおいて表現される事物や記号といった経験的實在物にその存在を全面的に預けており、それらを無数の組み合わせの中から選び出して配列させることで表現させる人間の実際の行為に拠っているのである。これは、われわれこそが理念のみならずあらゆる意味的なものの絆だということに他ならない。

2 ささまざまな真理表現の可能性の条件としての身体性

実際の行為としての身体活動が真理を生む

身体を用いた表現行為こそが、あらゆる意味や真理の可能性の条件である。三角形の作図を例にとると、三角形についての定義や意味を理解した思惟がペンを動かす手に命令を下すことによつて作図は可能となるのだろうか。そうではないとメルロ＝ポンティは考える。空間上における線のあり方や、それが示す「上」や「下」といった方向や、線を延ばすための手やペンの動かし方をあらかじめ知っている手が、それらを利用することで、三角形の作図が実現したのであって、その後、思惟による定義化が行われるのであり、その逆ではない。あるとき、偉大な手が最初の三角形の作図に成功し、それ以降われわれが三角形を作図できるのも、その定義化によつてではなく、さまざまな経験の中で身につけた空間把握能力や運動能力を参照し利用することで可能なのであって、三角形の定義はその表現の成否を確認するためにあとから思惟によつて用いられるに過ぎない。幾何学的な真理は空間性と運動性の担い手である身体を条件として表現されるのである。

身体図式の基本機能

「われわれの身体は、単に幾何学的総合のみならず、あらゆる表現的作業の、文化的世界を構成するあらゆる獲得物の、

可能性の条件である」(PP 49)。身体とりわけ各器官の位置についてわれわれのもつ統合イメージを表す心理学用語であった身体図式 (PP 141-15) をメルロ＝ポンティは積極的に改変しおのれの哲学に取り込んでいる。身体図式とはまず何よりも、私の身体が「ここ」にあるということがいかなる介在もなく直接に知られているという自明性を意味する (PP 106-108)。また、その「ここ」を中心にして、身体の各部位に方向としての「そこ」が与えられ、これによって空間が切り開かれる。身体は、考えずとも、おのれの体のどちらが上でどちらが下かを知っており、これは(特殊な病や実験的環境下を除けば)混同されることがない。手を伸ばして物を取るといふ簡単な行為においても、そこにはさまざまな筋肉運動や微妙なバランス感覚が総動員されており、これらを一拳に成し遂げるのが身体図式の役割である。それゆえ、身体図式の最も根本的な機能は、異なる身体部位を協働させることであり、何らかの意味や意図を指摘したさまざまな知覚や行為や表現が実現可能なように、眼や手にそれらに適した配置を与えることである。

共通性の基盤としての身体性

身体図式はおのれの体内にとどまらず、その身体が住む自然的環境や人間的状況、その中に位置づけられた自然物や文化物にまで拡張される。身体図式の実質的な内容は、知覚や行為の実現のために、身体の向かう先としての事物がいかなる構造を持ち、身体とのかかわり方や特定の状況下においてどのように反応するかについての膨大な経験の蓄積である。眼や手は、黒い点や鋭い角が身体にいかなる反応をもたらし、どうすればどうなるかをあらかじめ知っており、すばやく正確に、それを利用して、この積み重ねによって、きわめて複雑な行動をも可能にする。図式の形成自体は各人の接する状況に左右される(それによって個性がもたらされる)が、同じ世界に属する限り、身体図式はわれわれの共通性の基盤をなす。

意味の絆としての身体

われわれは、自然物のうちに意味や隠された真理を見出し、それによって身体の新しい使い方を身に着け、そのようにしてえた身体の使い方を利用して、無数の事物の組み合わせの中から特定の効果をもたらす組み合わせを選ぶことで、それま

でに存在しなかつた意味を実現し、文化物を作り出す。この過程を循環的に経て、自然的環境や文化的状況をおのれの利用できる住居として身体化してゆき、そのことでもって、そこに住むおのれのあり方をも見出す。自然物や文化物といった経験的实在物とそれが表現する意味は身体によってつながれているのである。というのも、身体こそが、それ自体も経験的实在物である眼や手といったおのれの異なる器官を協働させることで、手や眼自体とは別のものをして扱われる意味や意図を、知覚や行為といった仕方でも実現させるからであり、これを拡張して自然物や文化物のうちにも、それとは別のものとして扱われる意味や真理を見出したり、表現することが可能だからである。

3 諸真理の生存闘争

さまざまな意味や真理を生み出すことで、それらを定着させ、それを基盤にまた新たな意味を実現していくという皆でする際限のない運動をわれわれの身体は繰り返している。自らの生み出した特定の意味や真理を永遠化し、それらを真実として偶像的に信仰し、それを軸にした文化や行動様式を作ることさえ可能であるのも、この身体がする際限のない運動を基礎にしてである。たしかに、表現された真理は経験的实在物から解き放たれて「一種の永遠性」(pp.45)・「永遠性の感情」(pp.46)を帯びることもある。しかしそれは特定の真理に限られたことではなく、何であれ実現された意味であれば、この種の永遠性を保有することは可能である。というのも、永遠性とは、これまで変わらず真理であったということから、未来はおろか人間のいない世界においてさえ存在可能であると偽善的にも推定されたものが帯びる「時間の雰囲気」(pp.45)に過ぎないからである。永遠性の可能性の条件はわれわれの行為であり、行為の担い手としてのそれ自体経験的实在物でもある私の身体であり、身体が有限である以上、永遠性も有限である。虚偽や幻想までもが、それが一度実現されれば、それにふさわしい装置や言葉の組み合わせに宿って、おのれの存続を目指す。それゆえ、真理と誤謬との相違は、内的相違ではなく、それが現実における捉え直しに耐えてきたといつことにあり、他の真理との協調を保てるかといつことにある (ibid.)。

意味は、それが真理であれ誤謬であれ、われわれの身体を介して、おのれの存続を謀るべく闘争を繰り広げており、これは決定的な解決のない、われわれの置かれた状況なのである。

そうであるならば、二ヒリスムの根を絶つことはできない。というのも、あらゆる意味と真理はわれわれの身体を可能性の条件にし、その身体が有限である以上、われわれの生にはそれを主導する永遠の真理などないからである。にもかかわらず、「さまざまな外観が合致 *concordante* し、物や観念や真理へと寄り集まる」・「われわれの落ち着きのない思惟や、われわれの生における出来事や、集団の歴史における出来事が、少なくともある程度の時をあげば、共通の意味と方向をもち、ひとつの観念のもとに把握される」(PP 46; 強調部分は筆者による。)といった合理性現象 *le phénomène de la rationalité* (PP 48) が、われわれの生の根源的なあり方であると、メルロ＝ポンティが語る理由はどこにあるのだろうか。

第二節 時間性と真理 時間は私ではないが、私こそが時間である

1 真の時間直観

メルロ＝ポンティは「コギト」の章の結論部において、合理性の基礎を「世界自体」ないし「絶対精神」としての「コギト」に求める古典思想を退けた上で、むしろ「合理性の現象自体」がこれらの基礎をなすのだから、この現象をただ認めさえすればよいと結論づけ、次章「時間性」へとつなげている。ここから読み取れることは、時間性もしくは時間現象を読み解くことは合理性の問題につながりをもつとメルロ＝ポンティがみなしていたということである。しかしながら、「時間性」の章は、われわれに移行や変化の意味を教える真の時間とは何かという時間論を通じて主観性の具体的構造を論じることには費やされており、そこにおいて合理性の問題はわずか一度採り上げられるのみである (PP 492)。ここでメルロ＝ポンティは、主観性と切り離しえない世界こそが「すべての合理性の出生地」であると結論づけている。そこで、この結論に至るために

も、真の時間はわれわれが流れさせるのではなく、時間の中心には「誰か」・「唯一の推力」がいる、という「時間それ自体」の考察と、そのそれ自体としての時間が同時に主観性でもある、という主張の理解に務めよう。

2 時間性としての移行の総合

構成された時間

メルロ＝ポンティは「時間性」の章を始めるにあたり、因果性に基づく時間論を批判している。すなわち、時間が流れるとは時間単位ないし時間契機Aが原因となつてBを結果として惹き起こすことであり、時間とはさまざまな時間部分が因果的に連鎖した莫大な系列全体であつて、時間は因果性に基づく線的な運動であるとする考えを批判する。時間全体を通覧的に統一しながら、それ自体は特権的に時間の外にある無時間的主観性の、時間性の内的形式化とさまざまな時間契機の内的対象化によつて、この考えは補充される。しかしながら、このような意識は現在と過去と未来とを内的対象としての時間契機に当てはめることで時間全体を成立させており、時間契機それ自体として見れば、それぞれはこの意識からいわば等距離に置かれている。つまり、ここではそれぞれの時間契機はそれぞれの「今」でしかなく、無時間的主観性との関係で、未来なり過去なり現在なりの位置づけをいわば空間的に与えられるにすぎない。この「構成された時間」・「水平化された時間」は「時間の最終的な記録」に過ぎないのであつて、「そこから私が移行 passage や通過 transit がそれ自体なにかを学ぶような、それとは別の真の時間があるのでなければならぬ」(PP 475)。

移行するとは 現前野と地平性

それでは、われわれはどこで移行ということを学ぶのか。現在の野としての現前野において、私は時間と接触し、時間の流れを学び知る。現前野は、単に現に与えられている現在の広がりのみならず、その背後に過ぎ去つた過去の地平をもち、その前方にまだ到来していない未来の地平を伴っている。この地平性こそが過去の想起や未来への期待を可能にする。例

えば、机の傷跡から過去の出来事を思い出すという場合、それは大脳なり心なりに保存した記憶をその傷跡に当てはめるから思い出すのではない。そのためには、傷跡がその出来事の傷跡として私に認めることを許す何かとその傷跡になければならないが、傷跡自体にはその記憶を喚起するいかなるしるしもないからである。そうではなく、思い出すことができるのは、いまだ私とその過去の出来事と直接のつながりを持ち、その傷跡に過去の出来事を見ることができからなのである。

すべての時間は私が生まれたと同時に私に与えられており、それは決してなくなることなく、現在に地平として付き従っており、われわれは今でも昨日のあの時や、未来の来るべき時へと直接にその身をおいている。ただ思い出すだけでわれわれはそのあつたがままの過去に到達できる。私が現在にいる限りあらゆる時間は決してなくなることがないのである。ただし過去や未来の地平は、「私とその正面を見ている家の裏面のよう」(pp. 476)。現在とともにあるだけで、現在とは違つ仕方^で与えられており、全時間を現在にあるように全体として捉えることはできない。現在もまた、次の瞬間が来れば前の瞬間は移り変わつて過去へと向かい、まだ現在とのつながりはもつが次第に遠のいてゆく。時間の中の移行も、単に物がA点からB点に移動することではない。移行とは、在ろうとしているものから、もはや在らぬものへとむけて、在りつつ在ること^で、であり、時間の中においては存在することは移行することに他ならないのである。

唯一の推力としての時間性

車窓から眺める風景は列車の移動によつてその形を変えてゆく。近景に在るものはあわただしく姿を変えるが、遠景に在るものはその距離に応じた仕方^でゆつくりと形を変える。しかし近景にあるものが遠景にあるものがそこに在るものすべては、時間の経過によつてもそれとしての個性を保ち続け、決して絶対的に分裂したり、その前の瞬間との関係を断絶させるといふことがない。そう見えたとしても、それも変化であつて、そう変化することが予定されていたような変化である。時間^はこつした仕方^で、いたるところで、すべてのものを時間的に前後に配列させ、それらにそれにふさわしい過去と現在と未来を配分する。すべての在ろうとしているものをもはや在らぬものへと在らせるといふ移行を全面的に遂行する。これはい

わば世界の創造と解体とを一挙に成し遂げるようなものである。しかもこの全体的な調整は、途切れることも終わることもなく、細部に至るまで遺漏がない。これが時間が流れるということであり、知覚が暗黙裡に想定する根源的信念とはこの時間的な合理性現象のことである。しかも、時間が配分する三つの次元はそれぞれ別の働きによって与えられるのではない。「新たな現在の湧出が過去の沈下と未来の動揺を引き起こすのではなく、新たな現在とは未来の現在への、古い現在の過去への移行であり、ただひとつの運動によって時間が端から端まで揺れ動き始める」(PP 479)。未来からの圧力によって現在が出現することと新しい現在が古い現在を過去へと追いやることが同じことの別の表現に他ならず、この時間化の働きはただひとつの推力によってなされており、これが時間性なのである。

3 対象時間 おのれにおのれを与える光のごとき時間それ自体

時間は私ではない誰かである

以上のことから、「時間性」の章の冒頭でこの章の方針として挙げられた「時間をそれ自体として考察する」(PP 470)ということの意味が明らかになる。「私が時間の作者でないことは、私が私の心臓の鼓動の作者でないのと同じように明らかである」(PP 488)。時間性による諸次元の統一は「自然的にして原初的統一」(PP 479)であると語られるが、車窓から見える風景を一挙に調整するのが私ではないように、時間性は、原初的には主観性の内的構造ではなく、いわば人間的なものを超えた、みずからおのれを構成する時間なのである。時間、それ自体が時間のうちに在るすべてのものをそれに適した仕方ですべて的に調整し続けている。むしろ、時間は、常識がそれを擬人化するように、主題化されたり客観化されてはならない。「ちよつと、ある人がその言葉のそれぞれに全面的に現前するように、その表出のそれぞれに全面的に現前している唯一の具体的存在がある」(PP 482)のだと考えてはならない。しかし「時間は誰か *quelqu'un* である」(PP 482)。

時間の未成性と全体性

それ自体としての時間はその全体性が決して完全には構成されない構成体である。というのも、「時間というものは、それが完全には展開されていないときに、つまり過去と未来と現在とが同じ意味で存在しているのではないときにしか、ありえない」(PP 474)からであり、つねに地平を伴ったために、それを全体として通覧することが不可能だからである。にもかかわらず、時間はその外から時間ならざるものの介入が不可能な仕方でのその全体性が構成されている。時間には、それぞれの瞬間の個性さえも失われるような絶対的崩壊²⁾ということがなく、現在から過去への時間の分解であっても、この分解において解体するものは未来から現在の移行によって形成されたものに限られている(PP 480)。おれがあらかじめ含んでおいたもののみを分解するのだから、かかわりのないものによって取って代わられるということがない。これは、どのような突発的出来事であっても、それが時間の中で生じる限り、その出生地や向かう先が見出されて、初めからその内にあつたものとして、時間のうちに回収されてしまうことである。しかもこのような時間はいつも完全には構成されていないのだからその限界がなく、その外部が存在しない³⁾。時間とは、その内で絶えざる内部分解と再構成を繰り返すが決して全体的には崩壊せず、その外部というものがなく、あらかじめその内に在るものにとつてしか近づきえない、未完成の全体的構成体なのである。

時間とは意味の意味である

それ自体としての時間は何をしているのか。車窓から見える風景の変化が単なる風景の再配置に過ぎないように、時間にその時間展開を導くような唯一の目的はなく、ただおれを無動機的に湧出するのみである。それは、時間自身に他ならない現在を未来から過去へと移行させる推力であり、おれ(現在としての時間/未来としての時間)をおれならざるもの(過去としての時間/現在としての時間)へと移行させることでおれに合致する(時間が流れる)ということ以外何もしない「循環するリズム」(PP 484)である。しかし、それゆえにこそ、時間はその全展開を通じて、その内なるすべてのも

のを媒体物にして、「すべての意味の意味」(pp. 492)として、おのれを全体的に表現しており、これは私が身体である意味表現の原型である。というのも、意味化とは、あるもの(インクの塊)がそれ自身とは別のもの(意味)として、それ自身の代理ないし表現として存在するとき成立するからであり、時間こそは、未来を現在として、その現在を過去として、それ自身とは別のものへとめがけて移行させる全体的表現だからであり、全時間の推移によって時間それ自体という意味を示そうとする全体だからである。われわれが時間の全体的移行のうちにその存在を感じ取るこのような時間⁵⁾は「その全本質が、光のそののように、見せるということにあるような存在者」(pp. 487)であると語られている。この時間的展開を通じての時間によるおのれの表現は、時間それ自体にとっては、おのれを展開することでおのれにおのれを与え、それによって「おのれを知る時間」(ibid.)でもある。時間それ自体は、時間のうちに在るあらゆるものを時間的に調整し時間を展開すること、その展開のうちにおのれの意味を読み取るのである。

4 時間性の根源的獲得

現在の特権性

とはいえ、このような「時間それ自体」も私に取り込まねばならない。その皆となるのが、現在であり、そこにおいて流れることなく留まり続ける私の身体である。「私がひとつの現在を持っているからこそ、私にとって時間がある」(pp. 484)。変化しながらもつねに現在に留まり続ける私の身体の有限な視角こそが、まだ見えないものやまだ届きえないものの次元として未来を、もはや見えないものやもはや届きえないものの次元として過去を、現在とは異なる次元として、成立させる。流れることなく現在にとどまり続ける私の身体こそが、自己循環する時間自体に始まり(としての終わり)と終わり(としての始まり)という分節をもたらし、未来や過去の地平を切り開くことから、時間は現在の私の身体をその構成契機とすることで永遠であることから免れるのである。⁶⁾ 現在とは、ここを経ることで存在者が、決定的な一度を手に入れ、「消

し難い個体性」(ibid.)を獲得する場でもある。そのおかげでそれはその後も時間とともに歩むことが可能となるのだから、現在はあらゆる存在するものが目指す存在の頂点⁷⁾でもある。それどころか、時間自体でさえも、現在化してはじめて、おのれの過去・現在・未来という循環するリズムのうちにおのれの存在を確認できる。

私が時間である

私は時間において現在という位置を占めるだけではない。時間は私であるとして、私は時間であるとして、了解されねばならない。なぜ主観性としての私が時間的なのかというこの章の中心課題に対しメルロ＝ポンティは些か奇妙ではあるが、ブルーストが描く、スワンのオデットへの愛を例に採り上げて説明している。スワンのオデットへの愛とは、はじめは愛であった感情が嫉妬の感情を因果的に惹起したことはない。スワンのオデットへの愛は、はじめから嫉妬だったのであり、オデットからの疎外を感じたがために、それを全的に支配したいと思う愛し方だったのであり、スワンの愛し方はいずれ嫉妬へと変わることの避けられない仕方だったのである。ここに、主観性と時間性に共通する本性が示されている。主観性(スワンの愛し方)は、それ自身のうちにあらかじめすべてを含んでいるが、それを通じておのれを展開するその身体やそのさまざまな行為(スワンがそのときに抱いた愛や嫉妬の感情)がなければおのれが何者かも知りえない(嫉妬へと変わったことでオデットへのおのれの愛し方を知った)のだから、その身体やその行為こそが主観性でもある。同様に、時間性は、時間それ自体としての時間の推力であるが、それを通じておのれを展開するさまざまな現在がなければ何者でもなく、時間もまた流れないのだから、このそれぞれの現在こそが時間性でもある。現在へとおのれを展開し、それによっておのれを表現しておのれを知る主観性と時間性は同一の構造をもつのである。現在こそが時間それ自体と主観性が出会う場である。それゆえ、主観は時間として、時間は主観として、了解される。

時間性の獲得

しかし、にもかかわらず主観性と時間性は単に同一なのではない。そこには時間性の獲得という段階がある。「現在の未

来への炸裂ないし裂開こそ自己の自己への関係の原型であり、それこそが内面性ないし自己性を素描する」(Pp. 487)とされるように、時間性は主観性の原型ないし起源である。時間性の構造を主観性がおのれのものとして引き受けることで主観性が成立する。主観性は、それ自体としての時間の中に、おのれの意志にあらず受動的に生を受ける。しかしひとたび生まれれば、現在に特権的に留まり続ける身体という資格で時間とともにあって、(現在へとおのれを展開させることでおのれを知るという時間性の構造を原型として)私の身体を展開させることでおのれを表現し、おのれのあり方を知る。これが時間性の獲得である。時間はすべてを流れさせることでそれぞれの現在においておのれを表現しておのれを知るが、私は時間をまねて、私の身体にさまざまな表現行為をさせて、それによつておのれの意味を知るのである。それどころか意志や悟性においては、おのれの生み出した意味を永遠化させることで、時間を越えると思ひ込むことさえも可能であり、さらには、時間を生み出すのは私だと思つことさえできる。しかしそれも、時間性がさまざまな時間展開を通じておのれを表現する根源的な自発性であるからであつて、時間性をおのれの原型とするからこそ、そのなかで受動的に生を受けた主観性も自発性をもち、それを基盤にしてさまざまな意味を能動的に表現することが可能なのである (Pp. 489)。

おわりに

われわれの生においてはそれを導く永遠の真理は存在しない。というのも、真理や意味は、事物とそれ自体も経験的実在物である私の身体とが、その可能性の条件だからである。事物や身体が生成消滅するものである限り、意味や真理も永遠性をもたない。しかも身体は誤謬さえも生み出してしまつ。ここに、永遠の真理の不在を理由に、人間的な表現の努力は無意味であるというニヒリズムが生じる。しかし、メルロ＝ポンティは、それでも、われわれの生は合理性に満ちていて、真理へと向かっていると述べている。なぜそう言えるのだろうか。

この根源的合理性こそが、時間的な合理性現象であり、時間性である。時間はその内に存在するすべてのものを移行させ、それに適した配分で一挙に全体を調整する。この働きにはいかなる遺漏もない。時間は敢えて言えばつねにこの世界全体を創造しては破壊するという絶え間ない努力なのである。この時間の働きは私によってなされるのではない。そして時間は時間を流れさせることで時間の内なるあらゆるものに時間それ自体としてのおそれを表現する自発性でもある。ここに身体によつて意味や真理を生み出す人間の表現の働きが原型がある。

たしかに、時間の展開でさえもそのつどの現実化という試練を経ねばその恒存的リズムを確証しえないということとは正しい。次の瞬間が実現されない限り、時間が続くという保障はない。それゆえ時間的な合理性現象は永続する真理⁹とは言いえない。また、時間的な合理性現象が根源的であると認めたところで、それはいかなる目的もなくただ現象をそれに応じた仕方での時間的に配分するだけであり、それによつてさまざまな真理の真偽判定が可能になるわけではない。われわれにとつての真理は、誤謬や衰亡を含んださまざまな真理として、相変わらず時間のうちにとどまり続ける。その点では二ヒリズムの根は絶えない。

しかし、時間は、それ固有のテンポでおのれを展開し、唯一の意味へと向けてではないにせよ、前後関係を見失つことなく現象を配列し、時間的な隙間を作ることなく、見事な仕方ですべてを調整し、それによつておのれの意味を表現しつづけている。しかもそれは私がするのではない、ある種の人間性の排除さえ感じさせる原初的な時間であり、にもかかわらず、その受託こそがわれわれの自己性と生の基礎を形作っている。私の身体を用いておのれの意味を表現するというわれわれの自発性さえも、われわれは「すべての意味の意味」・「合理性の出生地」であるこの時間から学ぶ。それゆえに、この私がするのではない時間こそが私の時間なのだとして、新たに人間的な表現の努力を始めてゆく意志が湧くのではないか。ここから、おのれを淡々とただ作り上げては壊してゆく全時間的な調整の働きに学ぶことで、人間的な表現の努力は徒勞ではないという信念、新たにわれわれの真理を打ち立ててゆくことという意志をえているのではないか。われわれの生が真理への接近であ

ると語るメルロ＝ポンティにわれわれが出会うのも、ここなのである。

付記

以下の著作からの引用は引用略符合と頁数を本文に組み入れた。

PP : Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945.

註

- (1) 結局は、この「真理」は信念でしかない。
- (2) しかしそうならばなぜ仮想的とはいえないこのような時間の絶対的崩壊ということをイメージは出来るのだろうか。
- (3) ここでわれわれは「見えるものと見えないもの」における内部存在論の原型に出会う。
- (4) 意味の意味としての時間それ自体とは、あえて言うならば、われわれ人間と自然の歩んできた、これから歩むであろう歴史全体であろう。だがそれは、私とは何であるかが実際に生きてみなければ私にはわからないのと同様に、その中に生きるわれわれにほめかされるに過ぎない。
- (5) 「これこそが「すべての合理性の出生地」としての原初的世界に他ならず、われわれはここから、あらゆる意味や合理性といふことを学ぶ。
- (6) 「眼と精神」では、世界そのものであるような見える身体が生地の地に折り返すことで見る身体を発生させ、その見る身体によって見える身体が見られるものに分化する過程が論じられている。
- (7) しかし、現在にはなぜ存在の充実なのか。
- (8) しかしながら、主観性と時間性が同一の存在構造をもつことがなぜ、私が時間であることなのか、このことについての疑問は残る。
- (9) そのようなものは、なにもない。

本稿は、九州大学哲学会平成二十年度大会シンポジウムにおける筆者の提題に基づいて制作した、日本現象学会第三十回研究会における発表原稿を、加筆修正したものである。

(平成十八年本学大学院博士後期課程単位取得退学・九州大学文学部非常勤講師)